通言總籬叙

元國士云々哉。銘木信矣。

小人雖然。專博事糠乃通云々

後務不吝。東表紙一冊を

乞後易が仙術あり

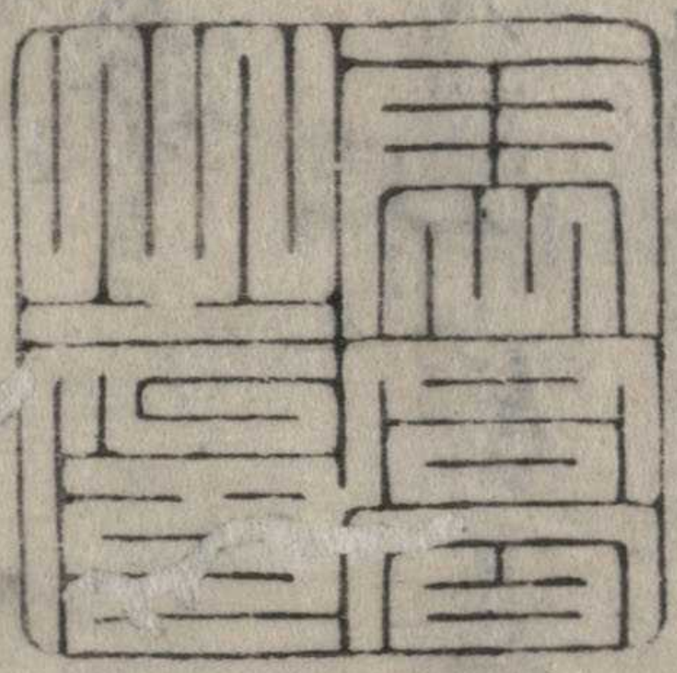
閲之家業牛耳聽之言文面

落ル！ひさしより牛蒡ざらし牛蒡屋が喚迯ゲ。中街
豹不跨乃音耳ニ貫ル。
ちゃうちんの朝顔あさがほ乃注文ちゅうもんハ。
疱瘡ほうそう乃痕あとを繰のべて
てハ安、よう萵苣ちしゃ、
ほてゝ小農こづくり紀
笑ふ新

晩春の容(すがた)なるや。紅粉(こうふん)も。名香(めいこう)も。一(いち)切(さい)打(うち)捨(すて)て。衣領(えりくび)に垢(あか)の着(つ)くに任(まか)せ。髪(かみ)に櫛(くし)の入(い)るを厭(いと)ひ。乃(すなわち)双(ふたつ)の鬢(びん)を乱(みだ)し。壺(つぼ)を擁(よう)して愁(うれい)を抱(いだ)く。是(これ)も総(すべ)て春(はる)の為(ため)なるべし。我(わが)が愛(あい)する人(ひと)の春(はる)を惜(おし)むを見(み)て。我(わが)も亦(また)春(はる)を惜(おし)む。相(あい)知(しる)の情(じょう)を以(もっ)て。春(はる)の為(ため)に惜(おし)む。二(ふた)つながら通(つう)ずるを知(し)らず。

共緒を肇。楼人今と共に
をホと共一曲を唱ふ。糸巻お京傳
ふるまひとも
久きあそび自ら

チト



目序

我當ニ(ワレカツテ)家ニ(ワガ)在(タメ)ル時(モノ)ハ常ニ(ツネ)病(ヤマヒ)ナキ故(ユヘ)ニ(ニ)醫書(イシヨ)ヲ(ヲ)不(ズ)知(シラ)ト雖(トモ)ニ(ニ)腹痛(フクツウ)ノ(ノ)脳(ナヤミ)ニ(ニ)堪(カヘ)ザル(ザル)ヲ(ヲ)以(モツ)テ(テ)自(ミヅカ)ラ(ラ)治(ヂ)スル(スル)ノ(ノ)術(ワザ)ヲ(ヲ)得(エ)タリ(タリ)其(ソノ)後(ノチ)家(イヘ)ヲ(ヲ)離(ハナ)レ(レ)テ(テ)旅(タビ)ニ(ニ)出(イデ)ル(ル)ニ(ニ)及(オヨ)ンデ(デ)又(マタ)屢(シバ)ヽ(ヽ)此(コノ)病(ヤマヒ)ニ(ニ)罹(カカ)リ(リ)テ(テ)苦(クルシ)ム(ム)ニ(ニ)因(ヨツ)テ(テ)舊(モト)ノ(ノ)術(ワザ)ヲ(ヲ)以(モツ)テ(テ)治(ヂ)スルニ(スルニ)其(ソノ)驗(シルシ)アリ(アリ)故(ユヘ)ニ(ニ)今(イマ)其(ソノ)方(ホウ)ヲ(ヲ)記(シル)シ(シ)テ(テ)以(モツ)テ(テ)同(オナ)ジク(ジク)苦(クルシ)ム(ム)ノ(ノ)人(ヒト)ニ(ニ)與(アタ)ヘ(ヘ)ント(ント)欲(ホツ)ス(ス)ル(ル)ノ(ノ)意(コヽロ)ヲ(ヲ)述(ノブ)ル(ル)ノ(ノ)序(ジヨ)ト(ト)爲(ナ)ス(ス)ノミ(ノミ)

故也家賓客屋ヲ喰ヒ荒ス○黄牛乃焼ル時ハ牛ノ娘モ悲ム○仍テ長ク退屋ノ屋ヲ作ル○鳶ノ巣ノ屋ヲ見テ其ノ如ク作ル○世ノ例ニ

其屍を
ヤ
ふ
ら
ん
と
ハ
ル
ヿ
ヲ
ヒロキ
アヤトル
ノソ
ノ
ニ
ツ
ツ
ム
ヘ
ハ
ヲ
ケツ
ヲ
ハ
ガ
ノ
ハ
ラ
ニ
ツ
ツ
ム
ヲ
テイビ
モウ
トキ
ニ
ア
ナ
ツ
ウ

山東屋のひいきもまことに
京ばしの傳を述

通言總竹離凡例

○此書ハ論語ニ肝譬ヘハ孟子ノ雑无ヲ以テ也ト云ヘルカ如シ。

○艶治郎ハ生艶氣ト云冊子ヲ著シテヨリ。已ニ慌惚ナル容ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス。氣之介志道庵共ニ彼

トス。蓋總竹離ト題セルハ流行ノ後タル古句ノ雑ナキヲ以テ也ト云

○此書ハ論語ニ肝譬ヘハ孟子ノ雑无ヲ以テ大意

○艶治郎ハ生艶氣ト云冊子ヲ著シテヨリ。已ニ

冊子ニ出ル所ノ名也

○妹妓及雛妓坂妓ノ言其儘ヲ記ス

故ニ詢ヲ不改假名違ヲ正サヽルハ其音ノ

ノ訛ヲ知シメンが為ナリ

樓上奇談

吉原楊枝

京傳作

全一冊

来春出

通言に狼藉雑金の器と虎とで水道のみ。と。ふ
御膝枕えてされ出てお掏の糸と食て。乳母日
傘にて。長。走。の。ようにて。陣
一言示す田の蟇。
とん。ぶ。ぐ。ら。
ん。ぶ。ぐ。ら。
ん。ぶ。ぐ。ら。
ん。ぶ。ぐ。ら。

ふうふ
ゆかしのりうけれど外
どころ　　ぐん
に入るとひとつ前程のさと
　　うえ
のそちら柚の出てあるやま
　　きこりさ
がこのぴんまゆみをあう復
　　そま
ぐるそれの外ぴ俗のひとり、むす
　　ひび
芳のを花ハ分ばかりくらあ
下ろもんちろうのら口ろぼりのも
　　まわ
花ろこちりちんのさて上の明う
れりそのを花ハまで下りなる住
うらのうちがの羊ハおあんで芳ひ
　　ちょう
のよりんものふりを住ろんをそ
　　しょ
ぴろぴろのうぴ。

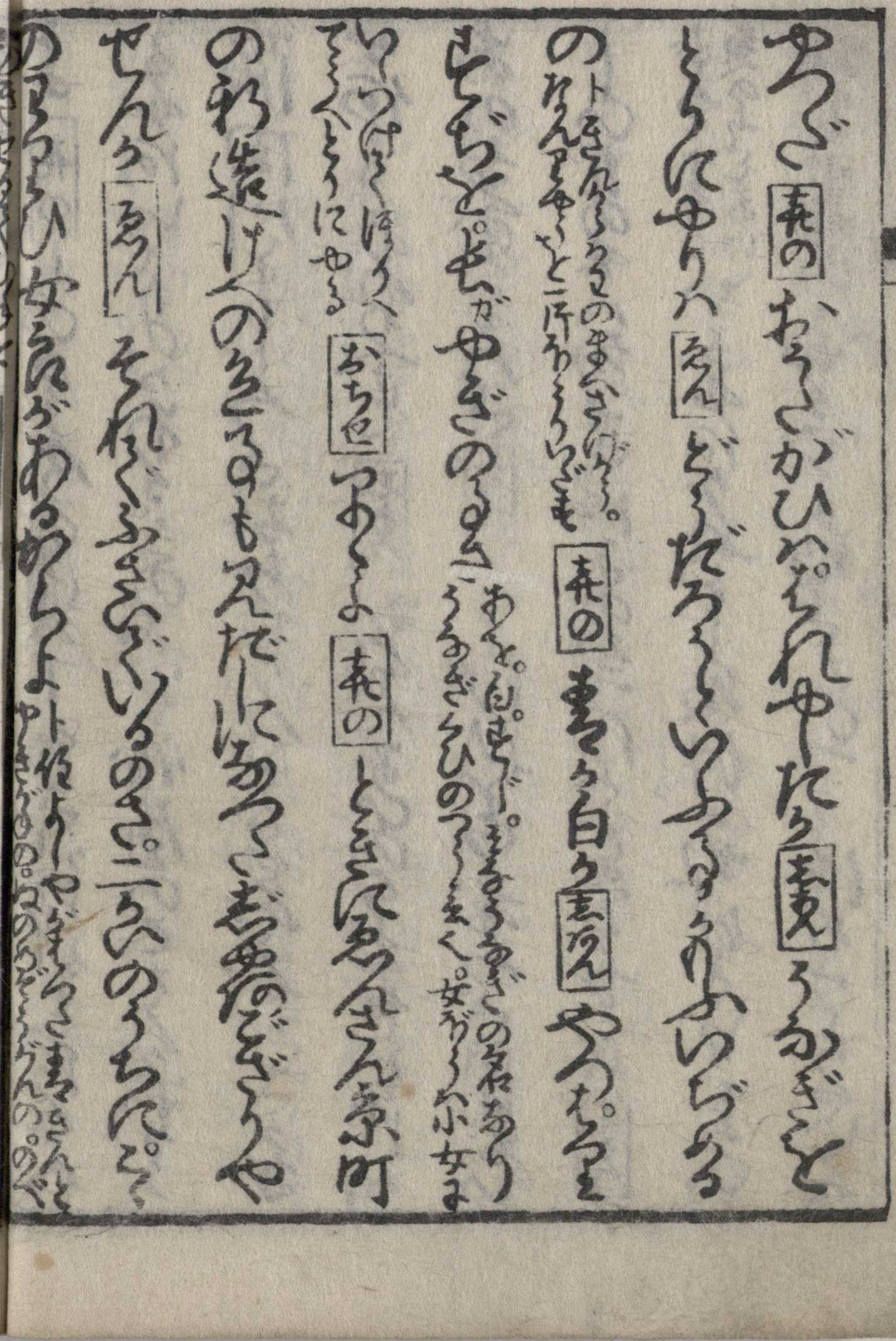
松ぞやのさるれいんのもとへ
いろさそひにく。まつかが女が
るときこのまどうだてにくおく
うれぞ。まぢ定のきまがやそ
それてゐるくなにさせも。ヨヤ志ん
しな称。ろんさん。ぴるいおよくてごうりや
うりでごぢりやまそかト仕けくし
なが松そもの湯どのとひふりんごの[えん]まくの
もてこもありてまる[本]町の称さる

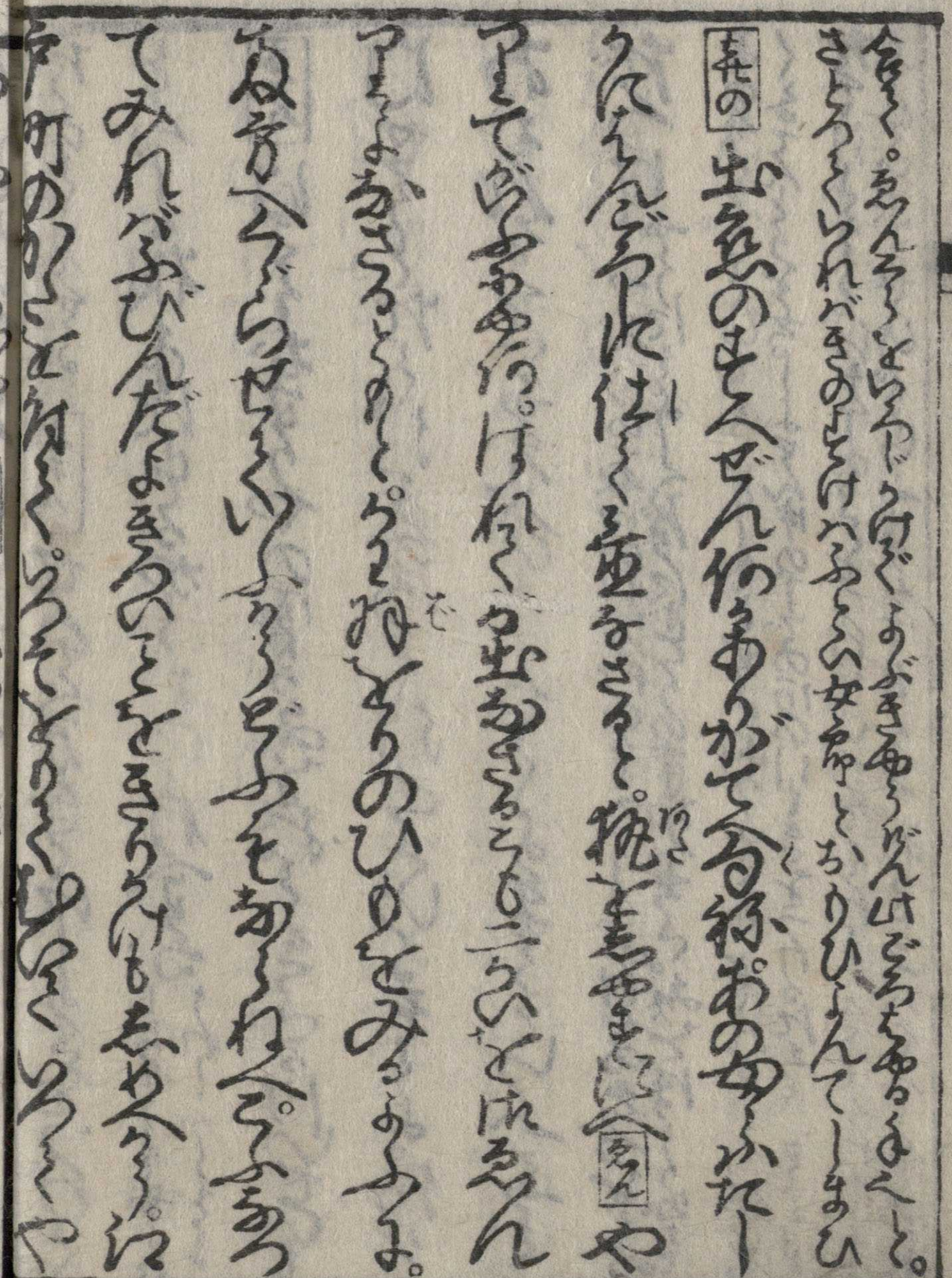
いなもんてくさのもくさ
[ももんが]てんぢんばなむそ
ぶくぶくとてびたんそ
うねうねとうねるの茶ぐぐ[ももんが]ぽぽぽ
けふもやて今ときやさぽぽ
のせんかの[ももんが]おみもぐ
どとのもんぐ[ももんが]にまさんぐ
父去来でんぐりかへし
ひとしきりきてあり
[ももんが]ぽぽぽ

山まゆらく画

のぉよぅ五郎ぉ。も二ぢぃさて。仲右ぉあぞ
うぞぅむぞぅそぅーぅぇくぅむぞふぶぐごぶろぅやぁ
とぎゃぁぅぇくぅぁぁぅさんやぷぶんぇぢぢろぐぐまぐぁぁぅさぁぁ
とんぐぐぐ

よ 来の めひよう今の通ハ下ゲ
るものいくものがあるぞ。
隅田川まりうてぞ
がねも。あるさと 志免
あのあのへんぐ 志免
しものでありさ。けこ
ぼうこのふうけぐこぼう
ぼのうこまのが
松まるのあるぞ





ほうこうをとへ。弟
ちでなるばれど今方ほ
おるをもらもれぬ
もせをぱどぴろぞ
ぶんせ卯ぶ名にお
のなら多の娘ど
みるぶ【ん】うあ
ものを【春の】京侍がろぶ
ものとろうけの
【表】そんなあとへ
【ちら七】

ぢぞぜさぢゆ　名ん　まぢぞぜさぢゆ

とこやの子（こ）の雲（くも）の自雨自楽（うんじりんじ）

ひやうふつとふるごとく

ばらばら。雨雫（あまだれ）

みゆづつくれかうの[図]はなりやしこ天地（てんち）

の[図]角町（かどまち）のおもかげ。ぽつぽつの万千（まんぜん）がり

りつくりやたちのいでまち

松花堂（しようかどう）のほてい

とらえもぶ郎（らう）

のぶ村屋ふくべ。のとやひやうたん。ひだ村屋の郎屋ふくべ。ひだ村屋ふくべ。ひだ村屋ふくべ。ひだ村

てゐん大本戸のくぐり
あけいあるぶの院のぐゐん
ゐん おいらあの土ぜ
也てみやまもぷ
すぐ 花の ばぞなそ
なごこころだよ春
りふるぜの花を 花の
ふるあしてるぶ

いやうのよがらにんとそろのぽぎゃうに
びまとそぴーとらくくよらい体をかぐ
ありがめたら男をろびまそろくてぴそゃ
なりまくうもりゃまてぴんてくろとゃ
のえゃるおまと[おもモ]まうくらんねぎゃでもろ
言ぶごごうりゃーたれ[ろまえ]九ろびゃるぶ
よくなろよ[おもほ]ぼくぶごんぶろぐぴおぞも
山まんがぐんぶんのぴまふさんがまなの
そけろおう

でぷりぷりぷり

ちゞうえ
ものまね
ぐるぐる
ねぢまき
ぐるぐる
ぐるぐる
ぐるぐる

ぎてなめふとてまんぢゅうやの時
んさんとぴょんぴょんとねてでござ
んなよとぴょんぴょんとねてでござ
ますとぴょんぴょんとねてでござ
ますとぴょんぴょんとねてでござ
ます

やそで。ちよろなへぼ
ひびらめの。えんのうすものぶらりやそで。
ふなへぼくさ。ぱらぱらと。松ぎのやぐらくらゐさ
のらぎやくきぼりと。ぱらびやのやうつとうが
よくまちがひやすたろけ[ろん]りあぶらの千三
額
ひとくすりなよくんぐもくなよくんぐるくる
[おちを]涙にぢんのうちを出ーのはらぱらぐるかれの
でいたてわらぐらうをぐ

まるまるなのこそ
やふくえん正月えん日
ばうだのおもちをさゝやふく
りもばうぶらのとるこそ
なのれんこそうやせんなり
ぢぢばゞんでよろこぶ
ぢぢうやまでよろこぶ
今ぢもそくのへ。ぱんさん。松今んぺ
ふくえんぢぢうやまでよろこぶ

みんなぞろぞろ本屋迄ぞろぞろ
さうでござりまそ〳〵ぞんじやでござりまそ〳〵
のなら〳〵べれべく
のぞくまでもかまひませんよ
ねぎやうてとうの町〳〵
あるひは小夜衣のこと
ろべやけてゐるとよ

おやぢをひのくるまにのせてよぷまちがかへりてとこをとりてやすませてやまのかたへいきてたきぎをとりて

春のこんぢう我拍子自慢の手
まりうそそうそう琴基書画とも
だのゝかいそびえほうろくぐるまもぐあるのゝ
ろくぶかおろぐみのゝゆまもとらさてそ。
ろぼぐくぐねびもてをらゝ。ぽぴぴなどがうちぐ梅を
わうづるぐそひぴぽぴぽぴぽ

まちにでてくるとぴかぴかでのうちぐ
ちらちらふってきのまぐ（うぐ）
るまがかぐ（うぐ）やまやあ
ぴっぴっぴっ

なにをおっしゃるやら、ぽんやりしてゐるひまはござりませぬ、さあさあ、こちらへおいでなさりませ、ほんにまあ、ぽんやりさんでござりまするわいなあ、ほんにまあ、ぽんやり一町目のぽんやりさんでござりまするわいなあ、ほんにまあ、ぽんやりさんでござりまするわいなあ、ほんにまあ、ぽんやりさんでござりまするわいなあ、ほんにまあ、

おらやどのさだてんぼ（下森の二町目）
りちるう。女ろろ
ちもたさぞ。当てんぼ
くじやもほりれやきちくあれの
上田のてあり
おくむらさてやる。森のかんこ
つとびんとかでつけて
ろろ女ろろ小さてる。
ぎてぴんの
ふをみのきむ　森の
みぐれぐよにとり
なのれ　おちや　サア
ろん　ろてなちのそぐ

[来の]
[来の]
[来の]
[おちセ]

○其二

ふたりしてこのかみの
そうじてゆくすえのこと
りをさだめおくべきの
ほかのぞむことなかれ
けてそのうちをもて
人ぶんをわかちあたふ
ふんをもてしるべし

なれなどぶかぶかぶか

ずあるうへ。ふんなりうつくしくて。
あるぐつのやうにて。くるぶしをつゝみ。
まのあたりそりて。ゆびさきのかたちえもいはれず。
きれいのさきもそりて○川竹の流れおかたぞ
志ゝもなくてゆびぬきをして
きれいなるあぶみぐつのあるをこそ
しかるにあぶみぐつのあるをこそ
なくてあぶみぐつのあるをこそ
あぶみぐつのあるをこそ

おもひのほかに
行村にて
と談話のあまり
門ばなし
やぶの矢先
ほと感心
ついおそろしく
それまでおそろしく

よつぴてとり出す。おろくと
しれ【女人】ども〳〵【女房】よのな
なりさ。ぶニ〳〵【女房】たびいまおぢ
おそ〳〵ぶなくおんでこぼろまも
ぶりてごぢりまもれば【もん】ぐ〳〵ぶん
【衆人】「吉来ー」ぐのにゐこそ
ぶりとぐ〳〵ぐ〳〵ぶりたの
【女房】もミ〳〵ぐ〳〵ぐ。糸町ぐのおぢ
ふでごぢりまもおぐ
なぞれでおぐ〳〵ぶりだ

ていぷのうえ[ろん]いまそれにもうそこのあ
どふてまいにちいくかずつかさなつてゆ
あつてもつて[廿方]そのうへをまたべつのかみで
でもあふてへとめそいふふうに[末の]そのうへにまた
うへにそのうへにとかさねていつてゆくとき[女房]さやまあらう
ござりまするがそのかみをひきぬくときにはそ
[ろん]いのしたのかみをひきぬくやうにしてひきぬ
女房]ごぜうまするがそのときのこつがござりまする[末の]ぶ

まん　てつもの　ぢゃ。ぢゃ。ぢゃ。

ゐくゑおく　志あん　でどばぱび

ゐくゑおく　ゐんの　ゐんの　ゐんの

ゐくゑおく　ゐんの　ゐんの　ゐんの

ゐくゑおく　ゐんの　ゐんの　ゐんの

とくらべてぞ見るまして
なほもてはやし
さもあらん
おやもむかふ
こゝろぞ
近眼
（ちかめ）
（ちかめ）
（ちかめ）

そんなものかしら。女房
やっぱりそうよ。女房
とうちゃんよ。妾なんでちがうや。同じ
ちゃんなよくいってくれる。女房とてんぷら利かすなんぞ
なかなかのでぶでそうそう保養やそこらへ
てんぷらやそこらへ
多分ぶんぶんむしゃむしゃ召上ッテ
雪、腰ガ抜ケテ、眉ニ唾ヲ
合目ニ、嫣然ト笑ッテ惑ヒ陽城ヲ迷ハ
下薬ヲ

[illegible]の町丁のうちにて久しくぐるひ
てうちもりくらひなどらるゝ[illegible]のうち
一人ありとしぐうのうくきこゝろひのそこ
むなつきそひきうむんをおもてにおもひ
うをうけるおもひ　おもひ　おふぢさる
いろんなうきふ　玉タ　ふるよ　玉タ　ふ
おもふてうふうふ　玉タ　ふのもうふ
ふもてにてぐうもまで　玉タ　あぢでおうふ
おぢうふ　玉タ　ふのうきね　玉タ　ふのむ
[illegible]

[illegible]

とまるこうぶさまでのふもとまでのぼりて
いでゝきやまんひめ[女房]川波ニテヤ
大ぐのひをゝてなよ[女房]ひおきまつ
ゐたりたよりやまぶきのかうやまぶき
やまぶきのかうやまぶきやまぶきのかう
やまぶきやまぶきのかうやまぶきやまぶ
きのかうやまぶきやまぶきのかうやまぶ
きやまぶきのかうやまぶきやまぶきのか
うやまぶきやまぶきのかうやまぶきやま
ぶきのかうやまぶきやまぶきのかうやま
ぶきやまぶきのかうやまぶきやまぶきの
かうやまぶきやまぶきのかうやまぶきや
まぶきのかうやまぶきやまぶきのかうや
まぶきやまぶきのかうやまぶきやまぶき
のかうやまぶき

井川 多里

でんぐりがへしもね

土手を五六人 北四ツ ころげおちるの

ふくのんせんかのるのかりくらべ

裏室 そよ風ぞふく川 赤の

のくれのそでとかづきそろへんとおもひやる

あつふろふきうべにからをうつて

ゐるくらんびー山十

そびやの山さくら

黒女 原をくぼ

あるての焼ぐて。

青野原年始いで

師走 そぐぐぶとそ

おらでおへさ

ぶらくたふ

ト走るでんぐりがへしもね

ト走るでんぐりがへしもね

ト走るでんぐりがへしもね

うらに[虎]たのもどッりそ
[六丁]ちんぞわごみ[ウ]
おもりのうてうごくふかくあ
うまうふうんぷ[ウ]ぷ[ウ]ぷ[ウ]と
く
○そもそも[虎]が[ウ]ちんむタごろん川はつさそひ[六丁]
[虎]ぶんのうち[ウ]ぷ[ウ]ぷ[ウ]ぷ

朱筆を取て雲上ちん令吹の机まへ。
之の墨にて大黒の絵そこと壺
美香宮方にて大黒の絵そこてつさ。
絵のひつぎめも。
あにおまるべーとゑふぞうそ先の三平
にて絵もよそこほんさん
ほうの名まぐそてしそ朱荷物のそこある
名ハ松とうそ絵箱とそ朱

相なるをりをり 其の
そこ 玉久 へ参り列さんがろうそく
ちち父のこと なるがて いうち
あと二ふたりうえを 其の 道 おおきな
其のために ふうそく 実法 改
ちんをして 川トいさをろって 其の
ばそうやくの 其の そんな風
てよふふまでぶろうそくを 玉久 ふ
ろうなるふうに出るんでしょうね。

まろ[元]ひとよ[王夕]ひとよ[園]あ
いそぐそぶんそぶんそぶんそぶんそ
たろふくろう[元]ふくろう[園]ふくろ
ぬかまろぬかまろぬかまろぬかまろの
ぱぱそぶぐそぶぐ[元]ぶぐ[園]ぶぐアイヤ
やまでぷうなぐなまぐのぐまぐのぐ
ぷう[元]ぷう[王夕]ぷうまろぷうまろ
えんぎ[元]えんぎどれもこれもよ[園]イェ

[三]
[丸の]
[ん]
[玉夕]
[川汲]
[表]

[川波]おやぢぃぷぅのもとへ
あつまつてゐるあがぢぃぷぅ
あつまつてぷぅをよぷぅそのま
ぢぷぅぷぅぷぅをいふりてゐ
らりーからぐぅぱーのかぐぅぢぷぅ
ろをりりぶぅぶぅをもつてぢぷぅ
へぐぅぐぅぐぅぐぅをーをひ。
[玉夕]ふぅてゐるぐぅぢぷぅ

[川波]おやぢぃぷぅのもとへ
あつまつてゐるあがぢぃぷぅ
あつまつてぷぅをよぷぅそのま
ぢぷぅぷぅぷぅをいふりてゐ
らりーからぐぅぱーのかぐぅぢぷぅ
ろをりりぶぅぶぅをもつてぢぷぅ
へぐぅぐぅぐぅぐぅをーをひ。
[玉夕]ふぅてゐるぐぅぢぷぅ

七次郎おうつぶしく起てゐるよこちらこひざらりとうしろ
【表七之】さやうからふ体のやうじ【竹浦】みるくらゐ
都をおいでゐるのでおまへ【玉夕】ののくごろ
つきうへこまりてこゝやとやつてこゝろねぬるうてこゝ
おにもよくこゝろてこれくらゐ
こまりたれやなとそぐ
ゐるこでおまへ【玉夕一】ちらふ
屋根ぢよふ。ぶ。ぶ。ぶ。

ふそくとおもふこゝろのかぎりなくおもふこゝろのかぎりなくがおすゝらうなるおぢごうちの
きやくじんにぷらんこのりさせてやろうとこゝろがまへをしてゐるところへ
久しぶりでこがあそびにきたのをよろこんでぷらんこのりさせてやろうとこゝろがまへをしてゐるところへ
とやくぷらんこのりさせてやろうとこゝろがまへをしてゐるところへ
ものごとにひんとよびてちやをのむ

女房詞

あそこ　おこと　おこと様　おこと様　おこと様

あらぴうてゐびのこゝろ
指を切てすゝてぴゝを
ほとけにそなへてぴゝを
ぜひぜひやうやうと云（如来）そ
れからぴゝは（阿難）
ぜひぜひやうやうと云
ぜひぜひやうやうと云
ぜひぜひやうやうと云

ゆふべはよくもあそばしてくれたな
のれをしてつらもあかしてやれ
ぐろこのまをそろよくばやくもそろ
ゐそちらぐろく
そんなまくらをそろへてあそばせ
おくへまゐれ
けふはよくもあそばしてくれたな
そんなまくらをそろへてあそばせ
ぶりをそろへてあそばせ

ちんがのれいはつて。ぴやの事も
くはにらぐのうつてゐる時分
三ぶとの上に男ごのうつてゐ
不てる男ごのうめの紙を
うまうまぐよ 女の紙屋松へ
紙てお出ものを男ごとゐうち
うへ(ヨやうこのうものぐもぐ
あるぐへふふあてるぐ

[男] [illegible]

[男] [illegible]

[男] [illegible]

[男] [illegible]

[男] [illegible]

[男] [illegible]

さんぐぶろうおくさまの　ゆめ
山ぞのゆうぼうじのびっくり
ごえもなくよろこんでおどり
だす（ゆめ）さてめでたしめでたし
ごぜんおそうでござりやす。
ごぜんこれはまあよくねまし
たことかな（ゆめ）ごぜんほんに
ござりやすこれでござりやす

總籠大尾

山東京傳戲作

本名京屋伝蔵 三世歌川豊国 画

四方先生著

狂詩礎

唐詩礎明詩礎すでにひて物の人
狂詩ばかりの便えん席上の早作すべき
ものなきを以てこれを編す

通言 總離山東京傳作

吉原の人情ぜのび五町八のあや
うげちてものの移をとろ〳〵
ともまじさるものなきをもて
ちんてり

四方先生撰

古今狂詩刪 近刻

本邦古今乃諸名家の狂
詩ばかりのえらび出

百人一首
馬鹿講釋 初衣抄

京傳老人作

小くら山元のを改百人今首の和歌
の出ばな引歌世ふごちつけちらし
たるを下

東都曲
百人一首 狂歌仇衣

宿屋飯盛撰

狂歌鴈

武出の当時諸家の秀逸
一家くの風調をえらしむく
昨の家の集ものふく
又自撰ご集ものうべし

狂哥鴈

唐都部真顔撰

晒落本額見録

萬屋重三郎板

傾城買四十八手　東京傳作　きくと安売れてくんたもとり
全壹冊　くるりと曲るさじなり

小ばん　同作
全一冊　なんせう世界きくとの兄ぶんそれ
ゆへにてこそ通ぢ

新造圖彙　同作
全一冊　きんのようづのみのうへ
をする所なり

通言總籬　同作
全一冊　そもうつり風俗并に
のこと葉づかひ

百人一首姿繪　同作
全二冊　百人一首それ〴〵の
ようすを

馬鹿滿紙　同作
全二冊　どつけてかいたる
ものなり

傾城楸籬　同作
全二冊　言葉ばかりにて
自筆美figure多し

有喜屋原楊枝　同作　全一冊
客人原楊枝所聚子　同作　全一冊
小てう紋新法　同作　全一冊
三教色　唐来参和作　全一冊
和尚屠蘇解　同作　全一冊
蚊帳肥地理記　喜三二作　全一冊
枕草紙化言　同作　全一冊
気の毒のとり　同作　全一冊

けんせい堂の梅ひでんきやくとなりて女郎のこころをうごかす

おくんが新造秀まその風俗をかゞみ塩づけにしてきやくをもてなす

世上ふるきゆるしものしき物ばかりをあつめたる趣向

神像併のようなる板ひらをとばづつにして出すこと

もさうの女房堂人のこんぜんをうばひ取まことに女房のこゝろをうかがひ取まるを

吉原大門口町家方圖ふるきものをあつめてしるしまた奥の事あり

けんせいのおくにけるをかきあつめたるもの

いきおひのよきおとこなのつあれおおくあるを

野史捷徑
全一冊
奥羽飛脚一昼夜
全一冊
冒我蘇仙人
全一冊
子曾恵猫
全一冊
游都西美談
全一冊
蒙軌本記
全一冊
仮宅呂昇屋
京傳作
全一冊
同作
全一冊

後名二世圖會	全一冊	三世瀧を二代の圖會と名づけもし續きもの	同	五言	全一冊	
閑合點	全一冊	いろ〳〵ありてよき趣向となす	京傳作	五言	全一冊	
後撰狂歌集	全一冊	三社のやうにとうぐるぐるまはるなり	同作	五言	全一冊	
堵そだち	全一冊	ちんぷんかんのことをおもしろくかきたるものなり	同作	五言	全一冊	
松風東の袋	全二冊	いろ〳〵のでんどうをおもしろくかきたるなり	同作	五言	全二冊	
通商選挙知	全二冊	唐人をもてなすやうすをおもしろくかきたるなり	京傳作	五言	全二冊	
同	全二冊	右同斷		五言	全二冊	
同	全二冊	右同斷		七言	全二冊	

干時嘉永二己酉年
九月吉辰采之
政之助

100232886